

## 賢治と「女性」(I)

浜 下 昌 宏

### 〈はじめに〉

宮沢賢治(1896—1933)は37年という短い生涯でこの世を去ったが、独身をつらぬき、また童貞でもあったという。彼の一生は禁欲的な求道者・修行者の手本のようなものである。とはいっても、彼の教え子たちや周辺の人たちの証言によれば、女性や性的なことがらに対して、賢治はことさらに偏屈な態度をとっていたわけでもないらしい。猥談に興じたり、春画をおうように眺めたり、また、ハヴェロック・エリス等の性科学書の原書を読んででもいたようである。一方、彼にも初恋らしきエピソードもあり、結婚も全く考えていなかったというのでもなかった。そして、むろん忘れてはならないのは妹トシの存在であり、また母イチのことも気にかかる。こうしてみると、実生活においても賢治の周辺には多くの女性が影響力を行使していたのであり、性の問題にも彼は正面から受け取めようとしていたように思われる。

賢治の作品においても様々な女性が登場する。童話におけるその多くは少女と言ってよいが、詩や短歌の中には恋する女性を仄めかす一節が見られるものもある。あるいはまた性意識に関して、『ガドルフの百合』のうちに「原始光景」(フロイト)を認めようとする解釈(福島章<sup>1)</sup>)もある。作品を介して賢治の描く女性像の特徴を抽出したり、性に対する彼の考えを推論することが当然可能であろう。

---

1) Cf. 福島章『愛の幻想』(中公新書、昭53)、p. 107 以下

さらに、「女性」というものをより抽象的・原理的次元で措定してみるならば、賢治の性格や行動に見られる「<sup>7</sup>女性的なるもの」を捉えたり、彼における「永遠の女性」のイメージを理解しようとする試みも興味深い。また、法華經における女性観がどの程度、賢治の行動・思想・信仰における女性観に影響を与えたかも探究するに値するテーマであろう。

以上のように、「賢治と『女性』」という標題は、一見すると賢治像を限定して描き出すための便利な視点に思えるが、しかしそれ自体広い問題領域と深い問題点を孕んでいるのである。「女性」そのものが、少なくともひとりの男性にとって、すでに問題概念なのである。ましてや、宮沢賢治という、あふれるばかりの豊かな能力を恵まれた男には、「女性」もまた彼の人格や表現の基礎を成す主要素のひとつであることは疑い得ない。『女性学評論』という発表の場を与えられたこの好機に、上掲の標題をめぐる、一篇ずつ論考を提供させて頂こうと思う。

## 〈ミス・タッピングのこと〉

### (1)

宗教的心情は賢治には天性のものであったが、彼は最終的には法華に帰依し、その遺言は国訳法華經1000部を刊行し知己に配布する依頼であったことは周知の通りである。むろん彼が特に法華經に惹かれた理由には何か微妙なものがあるのであろう。しかし他の宗教、とりわけキリスト教と賢治との関係も看過することはできず、事実彼の代表作のひとつと言うことのできる『銀河鉄道の夜』は、その舞台・雰囲気・思想等において、キリスト教的要素を容易に認めることが可能である。では、実生活において、賢治とキリスト教、キリスト者との接触はどのようなものであったのか。

それ自体、難しい問題である。賢治の作品中にキリスト者の固有名詞が出ているのは、ひとりとはバプティスト派のアメリカ人宣教師ヘンリー・タッピングであり、もうひとりとはカトリックのフランス人神父アルマン・プジェである。

前者は「賢治との接触が最もはっきりしている人物<sup>2)</sup>」とされている。

ヘンリー・タッピング<sup>3)</sup> (Henry Topping, 1857—1942) はアメリカ合衆国ウィスコンシン州デルトン生れ、シカゴ大学、ロチェスター大学で学んだ後、1892年5月まで南カロライナ州コロンビア市ベネディクト・カレッジで教壇に立つ(ギリシア語とラテン語の教師)。翌1893年宣教師として来日、東京学院(現在の関東学院大学)の英語教師となる。その後、1907年(既に50才である)から1920年まで盛岡市盛岡バプティスト教会で奉仕、伝道のかたわら盛岡中学(現在の盛岡第一高校)で英語を教えた。賢治が盛岡中学に在籍していたのは1909年4月から1914年3月までであるから、両者の接触は可能であった。タッピングの回想や当時の信者たちの思い出、教会の記録の中には賢治の名前は出ていないようであるが<sup>4)</sup>、当時の友人による次のような証言が残されている。「宮沢君に誘われてタッピング牧師がやっていたバイブル講義を聴きに行った。週一回の講義だったが、彼は英語がうまく、英語と日本語半々で話し、タッピング師によくほめられていた。英語のマスターとキリスト教への関心が彼の目的だったように思う<sup>5)</sup>」。

タッピング夫人<sup>6)</sup> (1863—1953) もバプティスト派の婦人宣教師として1905年来日し、まず東京築地の居留地内に築地幼稚園を設立、さらに保育者養成のため東京保姆伝習所(現在の彰栄保育専門学校)の創立に尽す。1907年夫と共に盛岡に赴任し、岩手県で最初の盛岡幼稚園を設立、アメリカからピアノを取り寄せリズム教育や個性重視の進歩的な保育を実践した。

当時、賢治はタッピング一家とより親密な交流でもあったのであろうか。そ

---

2) 上田哲『宮沢賢治』(明治書院、昭60)、p. 259

3) 以下ヘンリー・タッピングに関する資料は、上田哲、上掲書、及び『来日西洋人名事典』(武内博編、日外アソシエーツ、1983)による。

4) Cf. 上田哲、前出書、p. 263

5) 同書、p. 262 よりの重引。初出は『啄木・賢治・光太郎——201人の証言』(読売新聞社盛岡支局、昭51)所収の出村要三郎の手記。

6) 以下タッピング夫人に関する資料は、『幼児保育学事典』(明治図書、昭55)、及び『来日西洋人名事典』(註3)参照)による。但し、後者による情報は前者とほぼ同一である。

れを推測させてくれるのが『岩手公園』という詩である。

(2)

岩手公園<sup>7)</sup>

「かなた」と老いしタピングは  
杖をはるかにゆびさせど  
東はるかに散乱の  
さびしき銀は声もなし

なみなす丘はぼうぼうと  
青きりんごの色に暮れ  
大学生のタピングは  
口笛軽く吹きにけり

老いたるミセスタッピング  
「<sup>こぞ</sup>去年なが姉はここにして  
中学生の一組に  
花のことばを教へしか」

<sup>アーケライト</sup>  
弧光燈にめくるめき  
羽虫の群のあつまりつ  
川と銀行木のみどり  
まちはしづかにたそがるる

第一節の「老いしタピング」とはむろん上述のヘンリー・タッピングのこと

---

7) ちくま文庫版『宮沢賢治全集4』(筑摩書房、1986)、p. 69 所収のものによる。なお、同書の原文は縦書で各節は上下二段組で二行ずつである。また、同書 p. 355 f. に異稿(先駆形)が二編載っているの、興味のある方は参照されたい。先駆形ではタッピング一家に関する部分が全く現われていない。

である。第三節の「老いたるミセスタッピング」は同夫人、その子供たちが第二節に出てくる「大学生のタッピング」であり、第三節の「なが姉」である。タッピング夫妻と息子ウキラードは、学生たちを連れて岩手公園へ散歩に行ったのであろう。タッピング牧師は歩行の支えに杖を要する身だが、立ち止まりその杖で北上山地の方を指す。まだ残っている雪は銀色に光を散乱させている。老いの身と自然の厳しさが照応し合う。一方、大学生のウキラードは、夕暮れ時の哀愁も気になけぬ風に口笛を陽気に吹いている。タッピング夫人は一年前の出来事を回想して、今そこにはいない娘のことを思っている。東北の町に使命でやってきた異国の家族を、北国の夕べが静かにやさしく包んでいる光景である。

タッピング夫人の設立になる盛岡幼稚園に通った長岡輝子の思い出によれば、「この詩の頃のウキラードさんは夏休みになると両親の住む盛岡に帰省され、私達園児にナステーションの実を摘んでポリポリ食べてみせて驚かしたりするいたずらっ子<sup>8)</sup>」であったという。

ウキラードの姉、盛岡の中学生たちに花言葉を教えたというヘレン・タッピングについても、長岡輝子の回想に頼りたい<sup>9)</sup>。長岡輝子の姉と、やはりタッピング夫人の幼稚園で同窓であった小泉次郎は、筆名菊地暁輝として賢治研究に一生を捧げるのであるが、彼によれば『マリヴロンと少女』のモデルはヘレンであるという。その根拠は確かめようがないが、この臆説は賢治とひとりの女性との関わりについて我々の想像力を大いに刺戟する。

### (3)

童話『マリヴロンと少女』の原形は『めくらぶだうと虹』である<sup>10)</sup>。『めくら

8) 長岡輝子「わたしの賢治」(『彷彿月刊』1987年7月号)、p. 8

9) 同上、参照。

10) 二つの作品間の異同についての書誌的研究については、浜野卓也「テキスト評釈、マリヴロンと少女」(『國文学、臨時増刊「賢治童話の手帖」』、昭和61年5月 pp. 104—110を参照のこと。なお、同論文の「論評」部分については我々は評価しない。

『ぶどうと虹』は、『蜘蛛となめくぢと狸』『双子の星』が書かれた1918年から、『注文の多い料理店』『どんぐりと山猫』等が書かれた1921年までの間に書かれたと推測されている。賢治は盛岡高等農林学校（現在の岩手大学農学部）在学中、ないし卒業の数年後という時である。

『めくらぶどうと虹』は花鳥童話として分類される。ちくま文庫版『宮沢賢治全集』第5巻所収の版でわずか5ページ弱という小品で、ストーリーに展開らしきものはない。「めくらぶどう」が「虹」に対して捧げる思いの真摯さが唯一のテーマと言ってもよい。むろん、そのようなテーマにこだわらなくても、賢治特有の、全身の感覚すべてで味わうような自然の微細な生成変化・色・光・湿気や輝き等の描写の豊かさだけでも、この作品から感得できればそれで十分であろう<sup>11)</sup>。

「城あと」の、おおぼこ・赤つめ草・すすき等の雑草にまじって、やぶの中にめくらぶどうの実が「虹のように」熟れている。野鼠が穴から顔を出したり、もずが飛んできたりしている。すると、「東の灰色の山脈の上」に、大きな虹が「明るい夢の橋のやうにやさしく」現われる。先程から周囲の自然のようすに「感激して、すきとほった深い息をつ」いていためくらぶどうは、いよいよ待っていた虹の出現に興奮する。「今日こそ、たゞの一言でも、虹とことばをかはしたい」と思いつめているのである。「よるのそらに燃える青いほのほよりも、もっと強い、もっとかなしいおもひ」を伝えたいと願っている。その「おもひ」とは、虹に対する「うやまひ」を意味している。「私はもう死んでもいいのです」、「私の命なんか、なんでもないんです。あなたが、もし、もっと立派におなりになる為なら、私なんか、百ぺんでも死にます」、と虹に向かってめくらぶどうは言う。なぜ虹は尊いのか。高く光の空を彩り、すべての草・花・鳥が虹を称えるからなのか。本文中にその論証はない。明記されているのはめくらぶどうの自己卑下の心、虹にすがろうとする一途な気持だけである（「私を教へて

11) 以下『めくらぶどうと虹』のテキストは、ちくま文庫版『宮沢賢治全集5』（筑摩書房、1986）所収のものを用了。

下さい。私を連れて行って下さい。私はどんなことでもいたします。))。

それに対して虹は答える。「うやまひを受けることは、あなたもおなじです」と。「すべて私に来て、私をかゞやかすものは、あなたをもきらめかします」、と虹は言い、自分よりもさらに上位の光があって、その輝きの下では虹もめくらぶどうも、さらにはあらゆる地上の存在者が平等であることを説く。すべての「おとろへるもの、しわむもの、さだめないもの、はかないもの」が「まことのちから」によって「かぎりないのち」となると言う。従って、敬うことはそれ自体尊い思いであるとしても、虹すらも「まことにたよりない」存在であり、真に支え・導きとなるものではない。虹は同じ敬いをめくらぶどうに返そうとする。めくらぶどうの思いを拒むのではない。「私はどこへも行きません。いつでもあなたのことを考へてゐます」。そして、自然の者同士としての共生の方向を示すのである。「すべてまことのひかりのなかに、いっしょにすむ人は、いつでもいっしょに行くのです」。

——「城あと」とは現在の岩手公園のことであろう。そこに、福音への信仰を自分たちに課し、召命として盛岡に赴任した異邦人の一家が、かつて遊びにやってきたのだ。「東の灰色の山脈」とは、「老いしタピング」が杖で指し示したのと同じ方角の北上山地のことであろう。めくらぶどうとは迷える賢治たちの思いの謂であろうか。そして、虹とはタピング家の人たちを象徴しているのではあるまいか。とまれ、『めくらぶどうと虹』は、自然の情景の中に生き生きとした語らい、しかも自然の意味を突き止めようとする語らいを読み取ろうとする創作でもある。

#### (4)

『マリヴロンと少女』では、虹に代ってマリヴロンが、めくらぶどうに代って少女が登場する。自然同士の対話ではなく、人間同士の対話であり、マリヴロンは声楽家、少女ギルダはアフリカへ行く牧師の娘である。問われているのは

芸術の意味であらうか<sup>12)</sup>。

「城あと」には、おおばこ・赤つめ草・すすき、そしてめくらぶどうのやぶが自然の情景を成しているが、そこに楽譜を持ったひとりの少女が座っている。そこへその夜市庁のホールで歌う予定のマリヴロンがたまたまやってくる。少女は緊張するが、この好機に決意する、「たゞの一言でも天の才ありうるはしく尊敬されるこの人とことばをかはしたい」、と。めくらぶどうが虹に対したように、「よぞらに燃えるほのほより、もっとあかるく、もっとかなしいおもひをば、はるかか美しい虹に捧げる」という思いを伝えたいと願う。少女はマリヴロンに敬いを表明し、めくらぶどうと同じことを言う。「私はもう死んでもいいのでございます」、「私の命なんか、なんでもないのでございます。あなたが、もし、もっと立派におなりになる為なら、私なんか、百ぺんでも死にます」。それは帰依を求める心であり、献身の誓いでもあるが（「私を教へて下さい。私を連れて行ってつけて下さい。私はどんなことでもいたします。」）、少女をそのような気持にさせているのは、マリヴロンの芸術の気高さ（「先生はこの世界やみんなをもっときれいに立派になさるお方でございます。」）である。しかし、マリヴロンは少女に諭す。敬いは少女も受けるに値すること、少女がアフリカへ行ってする仕事は自分などよりはるかに立派で高いものであることを語り、さらにマリヴロンは自分の芸術の卑小さを述べる。「私などはそれはまことにたよりないのです。ほんの十分か十五分か声のひびきのあるうちのいのちです」。しかし、対比されているのは芸術と伝道の価値のちがいでない。マリヴロンは、いわゆる芸術ではない高次の芸術を構想している。「正しく清くはたらくひとはひとつの大きな芸術を時間のうしろにつくる」のであり、鳥が後ろにそのあとを持つように、「わたくしどもはみなそのあとにひとつの世界をつくって」いるのである。「それがあらゆる人々のいちばん高い芸術です」、とマリヴロンは説く。即ち、人間の正しい営みはすべて美しい芸術である、とする

12) 以下『マリヴロンと少女』のテキストは、ちくま文庫版『宮沢賢治全集7』（筑摩書房、1985）所収のものを用了。



考えである。従って、高次の芸術に至る点では、人間の営みの間に差異はない。「すべて私に来て、私をかゝやかすものは、あなたをもきらめかします」。少女の帰依の思いを断ち切るのではなく、マリヴロンは共感を表明し、道を指し示す。「私はどこへも行きません。いつでもあなたが考へるそこに居ります」。『めくらぶだうと虹』にあった一節はほとんど修正されずに生かされている。「すべてまことのひかりのなかに、いっしょにすんでいっしょにすゝむ人人は、いつでもいっしょにゐるのです」。ここで「いっしょにゐる」というのは芸術家と宗教家の連帯ということでは無論ない。あらゆる人の共生が高次の美、究極の芸術へと至る可能性が示唆されているのである。

とまれ、少女ギルダ像のヒントはヘレン・タッピングによって与えられたということが事実であれば、少女のどのような点にヘレンの面影を偲ぶことができるのか。その、我が身を顧みない、ひたむきな献身の情熱に関してであろうか。

(5)

ヘレンの父ヘンリー・タッピングは、晩年を東京で過ごし、戦時の厳しい状況下に死去、また母ジュヌヴィーヴ・タッピングは、盛岡を離れた後横浜、神戸などでも幼稚園長として働き、晩年は賀川豊彦の仕事の援助もしたという。

ヘレンについては今後の詳しい調査を必要とするが、長岡輝子によれば<sup>13)</sup>、一生独身で宣教師になってからも他の宣教師仲間から変人扱いされていたらしい。彼女も母と同じく賀川豊彦を助け、彼の秘書として通訳をし、賀川没後は広島原爆患者に献身する医師<sup>14)</sup>にノーベル賞をとる運動を起こして各国語のパンフレットを世界中に送っていたという。

全財産を日本に捧げた後、最後は養老院に入るべく帰米するのであるが、そ

13) Cf.長岡輝子、前出文

14) 大江健三郎が『ヒロシマ・ノート』(岩波新書、1965)で敬意を表している重藤文夫博士を指しているのだろうか?

のお別れにヘレンは長岡ともうひとり日本人牧師をランチに招んだ。「何年も着古した洋服、色褪せたスカーフ<sup>15)</sup>」を身にまとっていたヘレンを長岡輝子は次のように回想している。「賢治が『岩手公園』の中で『去年<sup>こぞ</sup>なが姉はこゝにして、中学生の一組に花の言葉を教へしか……』と歌った頃のヘレンさんは目もまばゆい程の若さに溢れていた。その賢治が亡くなって何十年たつことか……ヘレンさんはもう八十を過ぎているのだもの、私の目の前のヘレンさんは骨格こそがっしりしているけれども老齢と貧しさを隠そうともせず、不思議な静かさと優しさで私達を包み込む<sup>16)</sup>」。そして続けて言う、「一体賢治が中学生でありながらも異国の少女に少しは心もひかれたらうに、どうしてあの『マリグロンと少女』のような作品が生まれたのだろう。あの少女がこんなみごとな老婆になるとどうして賢治は感じたのだろう。賢治の予言者の素質を改めて感じるのです<sup>17)</sup>」と。

ところで、『賀川豊彦の全体像』の中で、笠原芳光は「賀川豊彦の文学」について語り、その末尾に聴講者との次のようなやりとりが記されている。

質問 ほぼ同時代に生きた賀川豊彦と宮沢賢治は、対照的にも思えるし、文学でいえば天と地ほどの差があると思えるのですが、お互いに知っていたのでしょうか。

笠原 このころ、宮沢賢治は『春と修羅』という詩集を出していますが、全くの無名の詩人で、評価した人は草野心平と佐藤惣之助の二人しかいなかったと言われています。また東京には半年ほどただけで、後は花巻で暮らしていますから、賀川豊彦はおそらく知らなかったと思いますし、交流もなかったと思います<sup>18)</sup>。

この笠原の答えは全く間違っていない。しかし、花巻と神戸という隔たりがあ

15) 同上、p. 8 f.

16) 同上、p. 9

17) 同上、p. 9

18) 神戸学生・青年センター編『賀川豊彦の全体像』（神戸学生・青年センター出版部、1988）、p. 81

賢治と「女性」(I)

りながら、両者をつなぐひとりの女性がいたことに我々は感動を覚える。献身は献身によって媒介される、と言うべきか。

## Summary

# Kenji Miyazawa and Womanhood ( I )

Masahiro Hamashita

Kenji Miyazawa (1896–1933) remained single all his life, and is said to have kept his chastity. However, it has been reported, in his life and attitudes he was interested in the female sex and some women he ever met. In fact, we know his legendary episodes about women and we can read in his works, poetry or fairy tales, some female characters.

In this essay, I discuss Miss Helen Topping, whose father once taught the Bible and English to Kenji in his school days. The poem "Iwate Park" suggests that Kenji had association with the Toppings. And Helen, according to some source, was a model of the girl in "Malibran and a Girl".

"Malibran and a Girl" is a version of "A Blind Grape and a Rainbow." The latter's 'grape' is changed into the former's 'girl', the latter's 'rainbow' into 'Malibran': natural personifications into human figures. Like Helen, the 'girl' is a daughter of a pastor who is going to Africa on his mission. The characters of 'a blind grape' and 'a girl' are outstanding for their sincere longing for someone else deserving of their respect and devotion. We can recognise in 'a girl' a passion for devotion like Helen.

Helen helped Toyohiko Kagawa as his secretary and interpreter. It is a wonder that there once was a woman who linked Kenji to Kagawa spiritually in spite of their spatial distance.